

## 日本医史学会平成24年4月例会 シンポジウム「富士川游先生と富士川英郎先生」

### 1. 富士川游先生のこと

岡田 靖雄

青柿舎(精神科医療史資料室)

いうまでもなく富士川<sup>ゆう</sup>游先生(1865-1940)は、呉秀三先生(1865-1932)らとともに、本格的な医学史研究をはじめ、そして1927年に日本医史学会を創立した人である。わたしは富士川先生を呉先生との関係からみていた(「呉秀三・富士川游両先生がであった頃——わが国医史学の濫觴をさぐる」, 日本医史学雑誌第27巻第4号, 1981; 「富士川游・呉秀三両先生の間——友情と医学史研究——」[富士川游先生没後五〇年記念会報告], 日本医史学雑誌第37巻第1号, 1991)。そののち『日本医史学会総会百回記念誌』(2000年)に「日本医史学会の歩み」をかくにあたって、富士川先生につきさらにひろくしらべるにいたった。さらに2008年には広島県安佐医師会の生命倫理・富士川游顕彰事業に参加して「富士川游先生と奨進医会——安佐医師会の揺籃期——」(安佐医師会会報第111号, 2009)の報告をするにあたっては、先生の宗教活動面をのぞく全活動にふれるにいたった。

今回「富士川游先生と富士川英郎先生」のシンポジウムをおこなったのは、2011年6月11日日本医史学会総会懇親会で先生作詞の「蘭学創始」を北原香菜子さんの薩摩琵琶で演奏していただくことになって、孫の富士川義之先生が懇親会に出席くださったさい、この企画にご賛同いただいたからである。

富士川<sup>ひでお</sup>英郎先生はドイツ文学者・江戸漢詩人の研究者としてきこえ、本学会の理事でもあられた。その子富士川義之先生はイギリス文学者である。昭和に1日でもいきた人をのせている『朝日

人名事典』(1990年)は、富士川英郎・富士川游・富士川義之をのせている。3代そろってここに掲載されている例はほかにほとんどないだろう。

さて、富士川・呉両先生はともに1865年の生まれ。富士川先生は安芸国沼田郡長楽寺村(現広島市)に、呉先生は江戸青山芸州支藩邸に生まれ、ともに芸州出身としてのちに交友をふかめていくことになる。呉先生が1891年までの主要な出来事をするした「自紀資料」(仮称)には、富士川先生との出会いについての記載はない。だが、土肥慶藏、両先生がしるしているところと「自紀資料」にしるされている下宿変更とを総合すると、呉・土肥両先生が本郷森川町51番地(釘店)本間氏に下宿していた1888年11月末から翌年1月24日までのあいだに富士川先生が呉先生をたずねてきたと推定される。富士川先生は1889年から、呉先生は1892年から『中外医事新報』に医人伝を熱心にかきだした。

富士川先生の父<sup>やすぐ</sup>雪(その先代までは藤川を姓としていたが、父から富士川とするすよようになった)が1875年に組織した奨進医会(はじめ有志医会)は、先生が1889年に広島県広島医学校を卒業して上京したのにもなってその主体が東京にうつり、1889年から『私立奨進医会雑誌』を発行するにいたった。この会は1892年3月4日に小塚原における観臓の日を記念して先哲祭をおこない、これは翌年から医家先哲追薦祭と改称された。この事業はのち日本医史学会にひきつがれて毎年開催された。日本医史学会総会の回数は、1892年の先哲祭を第1回としてかぞえている。わ

たしが入手した1906年の奨進医会会費収納簿には、呉・富士川両先生の名がその第1ページにのっている。奨進医会が目ざしていたのは、学術研鑽、医道の振興、医学史探究であった。

1896年には呉先生、尼子四郎(医学校で同級)などとともに芸備医学会を結成して、機関誌『芸備医事』をだした。1898年にはドイツのイエーナ大学に留学して、内科学、ことに神経学および理学療法をおさめ、1900年にはイエーナ大学からドクトル・メディチーネの学位をえた。同年5月には、おなじく留学中の呉先生および同郷の下田次郎とイエーナ市内で写真をとっている。

富士川先生の代表的著作『日本医学史』(1904年)は、一種の文化史として一般読書子に歓迎されたという。先生はこの著作によって東京帝国大学医科大学に学位を請求したが、教授会の投票で簡単に否決された。1915年に京都帝国大学から1912年の『日本疾病史』(上巻)により医学博士の学位をえたのは、呉先生・土肥先生を通じて親交のあった藤波鑑あきら(第4代日本医史学会理事長となった藤波剛一こういちの兄、病理学)の尽力による。そのまゝ京都帝国大学医科大学で先生は1909年から日本医史学講義をはじめており、その後各地の医学部などで医学史講義をするにいたった。先生の蔵書のほとんどが京都大学に富士川文庫としてのこされたのは、こういった事情による。

1910年ごろから医師批判の動き、医療社会化の動きが勢いをましてきて、“開業医の黄金時代”に影がさしはじめた。奨進医会はこういったあたらしい動きに敏感に反応して、医師の社会的あり方を探究し、そのなかには医師共済制度を実施しようとの声がかかった。1914年には、中心的役員が奨進医会とほぼ共通する日本医師協会が設立された。この会は医師の弔慰事業を主として

戦後までつづいた(この実務をになったのは、はじめは広島県出身の小田平義、のちには、日本医史学会第5代理事長となった弁護士たすくの山崎 佐 である)。

1921-29年と先生は東洋大学の社会事業科の科長をつとめた。化粧品会社の中山太陽堂は1913年に中山文化研究所を大阪に設立、1926年には東京麹町区に中山文化研究所を設立した。先生は1926年に中山文化研究所の所長となった(先生は熱心な真宗門徒であり、中山太陽堂の中山太一もそうであった)。日本医史学会は1927年に設立されたが、その集会は東京の中山文化研究所の談話室でひらかれていた。先生は1881年に創刊された『中外医事新報』の編集にたずさわっていたが、1917年にその経営権を手に入れていて、これを日本医史学会の機関誌とした。先生は呉、入澤達吉につぎ1938-1940年と日本医史学会理事長をつとめて、1940年に胆石症で死去した。

さて、先生がたずさわったのは、医療、医療ジャーナリズム、医学史探究、児童学、教育病理学、人間科学、社会事業、迷信研究、また日本医師協会の事業ときわめて幅ひろい。『医科論理学』(淀野耀淳との共著、1911年)といった著書もある。さらに宗教活動がおおきい。先生は広島県の人脈をうまく利用するだけでなく、富士川門下の四天王と称される人たちを組織するなど、ひじょうな組織力をもつ人でもあった。先生は当時反故扱いだったなかから膨大な古医書を収集されて、それを他人に利用させることにおいてやや寛大すぎる面もあった。先生がのこした古医書の内容検討はまだつくされてはおらず、先生がたずさわった事業の全容も解明されてはいない。この稿は富士川游という巨人の一半の輪郭をなぞっただけである。